

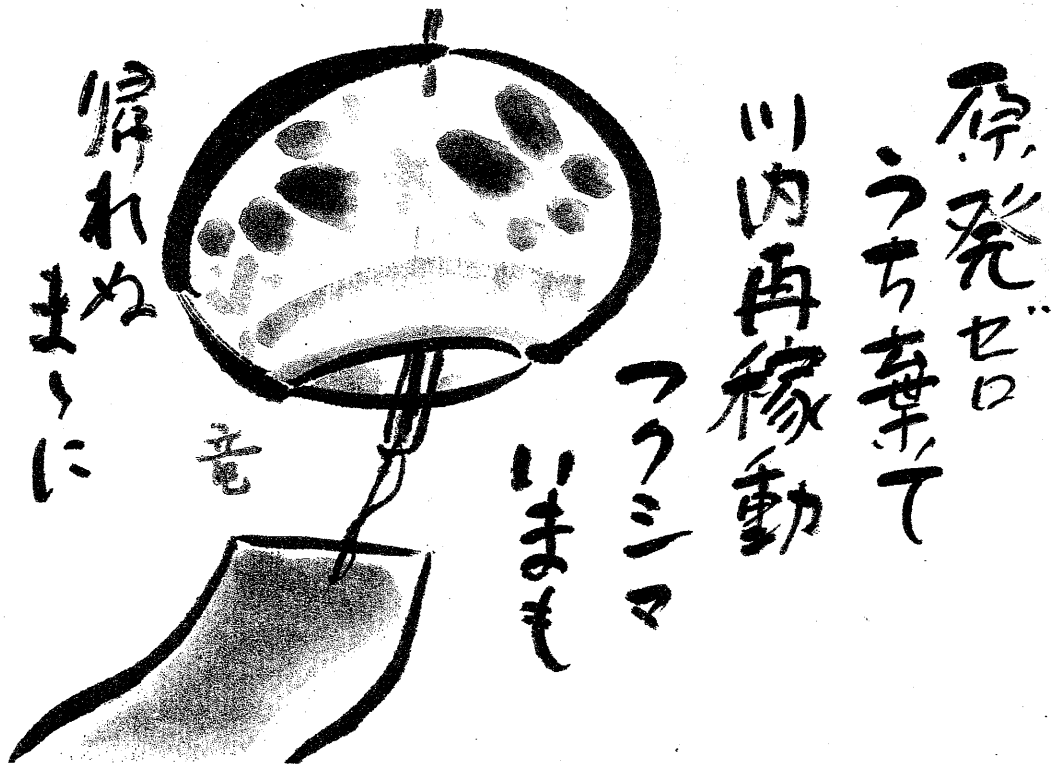
オリーブの樹

第131号

2015年9月13日

شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

- P 2 7月8月の歌 重信房子
- P 3 独居より 重信房子
- P 11 読んだ本 重信房子
- P 17 「イスラーム国」と宗派戦争（上） 重信房子

重信房子さんを支える会

七月八月の歌

重信 房子

俯いたホタルブクロに一匹の蟻雨宿りか梅雨湿り続く
 夕間暮鉄砲百合の純白の風に戦そよげば小鳥舞うごと
 陽を浴びて天に誇りて緋のムクゲタに命果つるを知るのか
 届き来し「暗黒世紀」切なくて書を閉じ静かに爪切りはじむ
 満月の照らす瓦礫がれきのガザの夏また少年が殺されたという
 灼熱の獄の空舞う赤とんぼ偵察機見上げし戦場浮かぶ
 鳳仙花弾ける如くそれぞれの戦争法案反対広がる
 上弦の月に輝く月見草ひとひの夏の命をおもえ
 草笛を吹く父浮かぶ獄の庭夏草が路を隠すこのころ



独居より 7月20—9月20

周期的なガザ攻撃は、「草刈り」「芝刈り」と呼んで、「自衛」の名で 過剰殺戮を繰り返し……、これらに利を見出す「現代の戦争」に 日本も決して無縁ではありません。

重信 房子

7月2日 今日も小雨でグラウンド運動中止。
 「戦争法案」が「平和貢献」の名で強行に進められようとしている今、70年目の夏ほど、反戦平和が国民の中にも響いているでしょう。「戦争法案と一緒に米澤さんはじめ「郭は人類と共存できない」と熱く暑い夏を闘っているのでしょうか。心から連帯を伝えます。

7月6日 「7・6だな……」と梅雨空を見ながら反省こめて思い返しています。どうしてあんなに多数だったブントを分裂させる必要があったのだろう……。当時の主観的に切羽詰った指導者間の（主要には塩見さんらの）小さな権力闘争が、ブントを解体させてしまった。あの7・6の日の強烈な体験はまた、私を「こうなってしまった以上はさらに前に進むしかない」と自らルビコン河を渡らせたのだと、様々な反省と共に思い返さずにはいられません。望月君を失い、遠山さんも、山田さんも……。『トップリーダー』というのは、何と言っても寛容な諸階層を統合包括しうる哲学が無いと状況に逆制約されてしまいます。

そんなことを考えていたら、ちょうど「情況」7月号が届きました。私の「イスラーム国と宗派戦争」も載っています。当初6月号に載せるつもりでしたが、獄外とのやりとりで、7月号となりました。7月号に納まるようにとずいぶん短くしてもらったのですが、少し納まり切れず残って、次号のようです。

(その作業のところが手違いか、一箇所残したい部分が抜けてしまいました。) (註:「オリーブの樹」の131号と132号には、その部分はずさず掲載します。)

今日も寒くて、午後3時半、点呼後7時の「拭身！」の号令にも拭身どころではありません。

宮崎先生の絵はまことにプロ並ですね。棚田のお題にその美しい絵です。“消え行くか瑞穂の国の象徴も”“傾斜地に広がる棚田美しく”“田植え時田ごとに映す夏の月”この句が気に入りました。感謝!

6月20日、奈良市で「戦争をさせない千人委員

会」主催の関西集会は、佐高信さんの講演に1200人の人が集まったと。話がとつても示唆に富んだ興味深いお話だったようです。講演では、戦争が親子を引き裂くようないかに非人道的なものかという話。また、平和を祈る歌「長崎の鐘」の作詞サトウハチロー、作曲古関裕而で、戦前さんさん「戦意」を煽って多くの人を死に至らしめたコンビ。西条八十も「出てこいニミツ マッカーサー 出てくりゃ地獄へ逆落とし」の歌詞の「比島決戦の歌」を作詞し、マッカーサーが東京入りした時、ただではすまないと覚悟したとか。「戦勝国による裁きをこれらの人は恐れただけで、死んでいった兵たちから問われなければならない罪に対する自覚は皆無でした。戦勝国にはひれ伏すが、自国の民・同胞の命に対してなんとも思わない。この落差は何だと言いたくなります」本当に……。同じ構造がずっと続いているのだという意見に同感です。

ギリシャでは「ノー」の国民投票が60%を越えたとのこと！ IMFや金持ち国の一方的な緊縮財政要求に、ギリシャらしい「直接民主主義」的反撃です。きっとポデモス(スペイン)、五つの星運動(イタリア)などやラジカルな左派は、ギリシャの一矢にブラボー！ と連帯表明していることでしょう。これからが大変ですが。

7月7日 七夕はいつも曇りか雨。今年もです。また肌寒い小暑になりました。本当はこの小暑はもっと暑い例年ですが……。

新聞を読むと、ギリシャは圧倒的多数の61%以上が緊縮財政ノーに投じたのです。新しい政治スタイル、左派の、または人民運動が欧州全体に広がっていくでしょう。混乱は避けられないけど、金融資本、IMF、独占企業に対して権利を主張する活動は「経済の民主化」として、益々人々に希望のエネルギーとなっていくでしょう。資本主義の強奪システム・富の偏差は問われるべくして、今あまりの格差に問われるべきだからです。

また、今日は「盧溝橋事件」の日、中国への侵略

オリーブの樹 第13号

戦争の発端として、戦後70年、日本側・日本の首相こそ思いをいたす日とすべき日です。

7月8日 肌寒い梅雨。それでもむくげの濃い紫ピンクの花がぽつといくつも昨日から咲き始めました。

今日は診察日。体調は良いことを伝え、CVポートのフラッシュをしました。

Tさん、お便り感謝。泉水さんの国賠訴訟は8月が結審なのですって?! 司法に期待できる日本ではないのですが、良い結果をやはり夢想します。

そちらも戦争立法に反対して、廃案めざして活動しているのですね。7月が正念場です。自民党は7月中旬に採決に持ち込み、参議院で採決されなくても衆議院で再議決できる「60日ルール」で逃げきっていくのは目に見えています。聞く耳を持たないひどい内閣ですから。なんとかそれでも阻止する手立てはないのでしょうか? 司法は「統治行為論」の詭弁で、憲法の骨抜きを許している張本人だし、三権分立のない国……。それでもそこからの闘いこそ力! ですね。連帯!

7月10日 まだ夏の実感のないまま、もう小暑も過ぎた週末です。デジカメ歌人の小暑の便り「ヤナギハナガサの写真です。南米からの帰化植物です。新開地などの荒れ地に初夏から初秋の頃まで咲いています。山形の花笠踊りの熱狂を思いうかべます。この夏、熱狂の渦の中で過ごしてみたい」と。可憐な薄紫の小花が、まあく笠のようにまとまっているステキな花の写真です。ありがとうございます。“ギョギョ!! 五寸の芋虫がによごによごと歩いている”の一首。管理されている私にはなつかしく羨ましい情景ですよ。

7月13日 週末11日から大快晴です。もう梅雨明けか?と思うほど30度以上の昨日。今日ラジオで「八王子35.5度です」と、東京は初の猛暑日です。やっと夏らしくて嬉しいです。夏はクラクラする程暑くなくちゃ!と、元気が出ます。窓の外には赤紫色のムクゲが咲き、見下ろす下には、まだ白百合が最後の花を咲かせています。

一昨日の新聞には、若者たちが果敢に反戦・反安保法制で声をあげている様子が出ていました。“若きらがマイクを握る反戦の訴え重なるわが二十代”と、思わず。老若男女の切実な要求には耳を傾けることなく、採決のタイミングを図るばかりの安倍内閣。

信じ難い側近の「勉強会」発言の幼稚さ。この時期、この党のこの首相であることが、未来にどれだけ悔やまれるでしょう。日本人は同じ轍を踏むのですね……。市民や沖縄の政治家たちの英知や熟慮した発言の深さと品の品性、知性の隔たりに嘖然としているのは、私ばかりではないでしょう。

7月14日 昨日、八王子は37.5℃だったとのこと。今日の予想も35℃。真夏のからりとした青空です。

今日は布団干しだったので、梅雨で湿った感じの布団が戻ったところで、掛布団はビニール大袋に仕舞い込みました。

昼に西瓜一切れ。おいしくしゃきしゃきと頂きました。

7月15日 今日は「オリーブの樹」130号受け取りました。感謝。もう130号なのですね……。2001年からずっと支え、発行して下さっている友人たち、ありがとう。2010年に「受刑処遇」になってからは、年6回になっていますが、変わらぬ支えに感謝ばかりです。

今日は、さつき昼の12時20分頃か「ニュースをお伝えします。さきほど衆議院特別委員会で集団的自衛権を可能とする安全保障関連法案の採決が行われ、自民・公明の賛成多数で可決されました」と、ラジオ放送を聞いたばかりです。「オリーブの樹」の今号の表紙に選んでくださった一首、「諦めぬ憤怒を込めて凝視する九条破壊の戦争への道」をしみじみ実感しつつ、机の上に置いておくところです。友人たちも共通の怒りとともに、抗議の行動を更に広げるでしょう。

今日の新聞に、垣根を越えて日本の学者たち9,766人が戦争法案に対して、廃案を求めているとの記事。「何とか撤回させたい」と、国民の過半数が願っているというのに……。「TPP」も「戦争法案」も、選挙公約とは真逆の国家主義強権でここまでやるか!? という図々しさ。立憲主義もないこの憲法違反を益々追及せねば!と、こんなところで「ごまめの歯ぎしり」ながら、友人たちに連帯です。

今号のさくらんぼの絵はいいですね!こんな風に巧みな素朴そうに見える絵、大好き!きゅうり、カボチャの花?!も、ドクダミの花、アジサイも。13頁の花、何の花? ステキです。庭にも、ドクダミの白い花が咲いているのですね。夕暮れの中、夕

ライに入って行水していた子供時代、その白さと可憐さに見とれたものでした。R子さんの絵は、なつかしさを引き出しから取り出してくれるようです。ありがとうございます。

短歌も四十余首から毎号選んでくれる歌に、あれ?と、自分ではきっと選ばない歌もあって、自分で選ぶより選ばれるのが楽しみです。今回は「書評」としてたくさんになりましたね。入力も編集発送もありがとうございます。

「編集後記」も戦後70年を振り返る話、身近に戦争があったのですね。それにしても、憲法無視、国民無視、立法院無視の安倍強行採決は許しがたい。

7月16日 台風11号の上空変化とかで、夜来の大雨。音も大きくてすごい降り方です。ラジオで「東京八王子1時間に35.4ミリ」というニュースになるので、すごい降りなのでしょう。

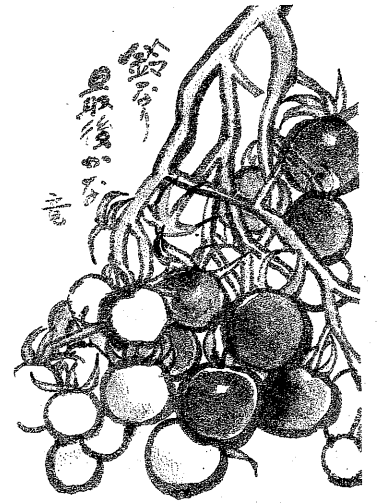
Sちゃんの、去年記事になった「革命の子供たち、この映画でパレスチナのたくさんの友人たちに出会いました」の文、読みました。Sちゃん、16歳で父、足立さんに会いにアラブへ来た日々から、メイとはまた違った「革命の子供たち」の苦難と葛藤を、そうとらえず、明るく語っています。謝って逮捕もされた97年2月15日、その後ペイルートで父親らの救援にずっと尽くしてくれたこと、初体験の様々なことに興味、好奇心をまっすぐむけて語るせいは、初対面の時から変わりません。思いだし、涙とともに読みました。本当にいろいろごめんね、そしてありがとうございます。私たちの娘の一人です。

7月17日 夜来の台風の雨風。今朝も静かですが、まだ降っています。アラブでは、きっと昨日にはラマダンが明けて、今日は祝祭がはじまっているのでは?と思います。

7月18日 イラクのシーア派住民地区の市場で、自爆攻撃で百人以上が殺された、とラジオのニュース。ISが声明を出して、その責任を誇示したとのこと。人々が戦争の痛みと苦労の中で、ささやかに祝そうと集まる市場に……。

昨日から冷やし枕(アイスノン)が高齢者用による、貸与されました。丁度暑くなってきたので助かります。連休、みんなどう過ごしているのでしょうか。

7月21日 庭に一本あるムクゲの花が真盛りです。



葉の繁みから頭を一つ出して花は天に向いて咲いているので、ぼんぼりのような緑のまわりに濃い赤紫の花を飾ったみたいに鮮やかです。夏らしい日が続く夜は窓を開けて冷し枕(65才以上の高齢者に熱中症対策で夜から朝まで貸与)で寝ています。明け方空気がひんやりとひたひたと房に浸ってくるこの夏の朝が好きです。みな多忙な夏を過ごしておられるでしょう。関西は台風、豪雨被害で農場などはとくに大変な時と思います。

7月22日 主治医の診察日。CVポートのフラッシュのあと主治医からCVポートの抜去をする方が良く提案されました。やはりCVポートを装着したままだと血栓が発生するリスクがあり、それが心臓の方に流れるので抜去した方がよいとのこと。ここではCVポートを埋め込んでそのまま死を迎えるケースが普通のようなのですが、私の場合はCVポートを抜去しても大丈夫でしょうとおっしゃって、私の腕の血管もチェックされました。私も前から移監時には抜去してほしいと伝えていたので移監があるのか……と気になりましたが、そういうことよりも医学的に主治医は判断されたようです。「抗がん剤が必要な時にはなた装填することも可能です」とのこと。今後外科と相談して抜去施術をするとのこと。器具が肉と一体化しているので小手術の際に血栓出来ていないか慎重に行うとのこと、主治医にお任せすることにしました。私もその方が安心です。運動時気軽になりますし。

大谷先生「暗黒世紀」(坂口弘歌集)ありがとうございます。すぐ読みはじめ、著者の姿がうかびあがりその孤高の達観を感じています(感想は13

頁に。

7月23日 むし暑い小雨でグラウンドは中止。この一週間歯周病が悪化して今日は歯科診察に呼ばれました。また奥歯を抜歯した方が良いといわれています。

7月24日 新聞に鶴見俊輔さんが逝去されたとの記事。Sちゃんはじめ教え子たちが悼みつつ感謝の想いにあることを感じます。ちょうど記事に上野千鶴子さんの寄稿があり、哀悼のその文の中に「みみずの学校」のことも記されています。「はなかみ通信」で引き続き先生の言葉を伝えて下さることを期待しています。合掌。

今日丁度届いた「サイゾー」を読んでいたら「古書業界でひっそり人気の新左翼機関誌」意外な新左翼ブームとか？ 武装闘争やゲリラ戦に人気。69年01・21写真集「10・21とは何か」は10万円とか。「世界革命戦線 VOL2」は4.2万円！（72年のもの、リッジ闘争のもの）。「銃撃戦と粛清と」2万円。「腹腹時計」3千円などとのこと。本当かしら？

7月27日 暑い盛り、茶道。蟬の形の花瓶に活けられた白ムクゲの花の和室で今日も抹茶を頂きました。優雅な獄の一時です。

CKさん7月国会前の強行採決抗議に参加した様子を伝えてくれました。「主催者発表で2万とか2万5千とかは7時半8時に集会が終了するのでそれまでの人数です。すごいのはそれから。帰るぼくたちの列と反対向きに何倍もの数の人が続々とつめかけます。これまで知っている集会の形態、雰囲気はまるで違います。若者中心です。若者たちが大人の集会と一体になって戦っています。」と。傷ついてなおも真白き入道雲「の一句と共に。ありがとう！

7月28日 午後、盂蘭盆会がありました。新盆の西浦さんの冥福を祈りながら「冥福どころじゃないよ、安倍の『戦争法案』のでたらめなごり押し!」と、言うなあと思いつつ焼香しました。そうだ……ドクトーラは、もう去年初盆は済ませて、今年は二年目なのだと思いつき、丸さん、家族、友人たちの平安を祈り、闘いの人々の前進の拡大も祈りました。

7月29日 「泉水国賠つうしん」5月25日の口

頭弁論の報告書を受け取りました。Tさん、Fさん二人の原告の証言した報告です。大法廷だったので、仲間たち支援の方々が41人も傍聴くださったとのこと。そして、8月6日に最終口頭弁論（結審）判決前の最後の法廷が開かれるとのこと。弁護士、友人の方々によって、最善を尽くして裁判が進められたこと、感謝と共に、見守るばかりです。正当な判決は、期待できるでしょうか……。

前田先生、暑中見舞ありがとうございます。「違憲」の指摘にも「沖繩の声」にも一切耳を貸さない安倍政権を批判し、「二者択一的政治や一元的支配を招来した小選挙区制には、終止符を打つべきではないか、そう思うこの夏です」と前田弁護士は記しています。全く同感です。

7月30日 蒸し暑い中、グラウンド運動へ。麦藁帽子をかぶらないのは、私一人。かぶると走りにくく、むれて余計暑いので、かぶらずでした。直射日光もそれほどでもないかな……と思っただけ、やはり暑い。もう、とんぼが気持ちよさそうにスイスイと旋回しています。大雨が降ったおかげで、がぜんクローバーが元気になって、5月のように満開に咲きほこっています。ムクゲの花はもう終わりそう。走ったら、何だかすごく疲れて、うーん熱中症にもなる年齢だな……と、房に戻って冷水摩擦をして、少し横になって深呼吸。

午後はコーラス。膝の手術をして、リハビリ中でも元気な80代の先生のエネルギーには感心してしまいます。手術前検査で、肺活量は40代の人と同じと驚かれたとのこと。「大声で歌うと走るのと同じエネルギーが必要になり、身体を鍛えます」と励まされつつ、「海」「夏の思い出」「花は咲く」を歌って、すっきりしました。

昼は夕立！ やっと昔みたいに雷鳴ってザーッと降って、そのあと太陽キラキラの久しぶりの夕立でした。

7月31日 早くも七月尽。日々「戦争法案」廃案のため、みな暑い中尽くしていることでしょうか。30日の参院特別委員会では安倍首相、自党の森雅子議員らに質問させて、「戦争に巻き込まれることは絶対ない」「徴兵制全くありえない、今後もない」「専守防衛いささかの変更もない」「ない」と断言して見せました。強気の答弁で具体的想定抜きの断言です。だったら、なぜ戦争法案、「集団的自衛権」必要なの？

不要廃案でしょう。

キューピッドおばちゃんも元気で闘っています。「15日の強行採決の後には自民党大阪府連前や大阪駅北のヨドバシカメラ前で若い学生さんたちの呼びかけもあって、2700人が抗議に集まりました。18日の扇町（なつかしい！）公園には一万人以上3つのコースでデモ。梯団の数は多くてわかりません。翌19日には若い人中心に一万人近く個人参加デモ。うつぼ公園から、本町、心斎橋、難波と御堂筋を南下。『いつまでも次々と梯団がやってくる。いつまで続くねん……』と、難波で迎えた友人の話。珍しいこと。数が多ければいいというわけじゃないけど、やはりこの時期うれしいです」と様子を伝えてくれています。数多いのはやっぱりいいですよね！！

「暑い暑い！ 元気なのは庭のミニトマトだけ」とYさん、ありがとう！「今朝の新聞で、満州開拓団にかつて村民を送り出した信州の寒村の人たちが安保法制反対のデモをしたというニュースに涙を抑えられませんでした。戦争も原発も絶対いや。経済的に豊かでなくていい安穏なら」と。日本に住むすべての人々の多数意見ですよ。同感です。

「冤罪とジャーナリズムの危機」（浅野健一ゼミ in 西宮報告集 鹿砦社）送ってくださってありがとうございます。すぐ読みました。（註：書評は15頁）

パレスチナでは、ガザの復旧のないままの夏どう過ごしているのでしょうか。

8月2日 7月31日にパレスチナ ナブロス近くの村で民家2軒が放火され、死傷者、入植者、過激な右派シオニストの行動に抗議した少年が7月31日胸を撃たれて殺され、ガザでもイスラエルが勝手に決めた境界ゾーンに近づいたとして17歳の少年が射殺されています。再びイスラエルは挑戦と暴力でパレスチナ人虐殺を深めています。周期的なガザ攻撃は「草刈り」「芝刈り」と呼んで「自衛」の名で過剰殺戮を繰り返し、実際には軍事技術・兵器のための実験場としています。これらに利を見出す「現代の戦争」に、日本も決して無縁ではありません。

2014年5月ネタニヤフ来日の共同声明でドローンサイバー兵器を含む軍事分野での協力、技術交流拡大が謳われ、イスラエルを準同盟国と呼び、自衛官を派遣し、実務レベルで交流深化も確認しました。日本・イスラエル・ビジネスフォーラムが開かれ、今年1月の安倍中東イスラエル訪問へとつな

がって、います。米も軍事力を優位に保つための軍事技術向上「第三次相殺戦略」で、「ステルス技術、ドローン技術、海での無人探査、宇宙空間の情報強化、サイバー戦技術向上などをめざす」として、日本やイスラエルとの技術開発も考えているとのこと。

こうした流れの中に、安倍「戦争法案」「武器移転三原則」があるのは歴然。ガザで回収されていた不発のミサイル誘導システム部品にソニー電子部品が使用されていたが、日本も武器輸出が安倍政権で加速しています。

8月4日 猛暑日続きで夏らしい日々を楽しんでいます。朝から親類の面会もうれしいものでした。差し入れもありがたいことです。

友人の送ってくれた「ガザ大虐殺一周年デモ」は、ATTACや「ストップ！ソーダストリーム」キャンペーン、パレスチナの平和を考える会、「テクニオン大学の研究拠点設置に反対する市民の会」などが、7月8日デモを敢行したのです。

とくに資料に興味深いのは、「殺人ロボットを開発するテクニオン、イスラエル工科大学の研究拠点設置に反対している市民の会」の主張です。軍と一体になってパレスチナ人を実験台に、ドローン、無人武装ブルドーザー、装着式ロボットなど、日本のロボット兵器技術を取り入れて、さらに商品化、市場化しようとする動きです。今、この初期の反対行動は貴重です。「この度、テクニオン大学はテクニオンジャパン（株）を通じ日本の優秀な技術を持ち企業とWINWINの関係を築きたいと『ハイテク都市』である京都に進出いたしました」と自己紹介し、一刻も早く事業化できるイノベーション技術を日本、とくに京都の企業と数ヶ月単位、遅いものでも1年以内を目途に事業化をめざすとのこと！ 直接戦争加担を日本は許すのか？！と驚きのイスラエルの早業です。8月2日に書いたことがあまりに具体的でびっくりです。

8月5日 運動でベランダに出ると、日射しもずいぶん強くなっています。でも、イラクやシリアの強い日射しから見るとまだまだ！

今日の診察室では、8月3日採血の検査結果を教えてくださいました。腫瘍マーカーCEAがまた、5.0に上がりました。ドクターは「5.0までは正常値です。5.1から異常で、今は大丈夫ですよ」

とのこと。4. 0だったのに……。次に上がるか下がるか……。体調はとても良いです。

8月6日 広島・原爆忌。空は青く晴れています。東京は一週間猛暑日が初めて続いたと、今年の暑さをラジオで語っています。

ヒロシマの集い、米澤さんはじめ、みな参加したり行動したりしていることでしょう。起床前の空、西の方を見つつ、ヒロシマに連帯、食事の8時15分頃にも合掌。グラウンドも今日は36度を越える感じの中、麦藁帽子をかぶってトラック一周。暑いけど気持ち良いです。赤とんぼも数匹。蝶も紋白蝶、しじみ蝶がクローバーの中を飛び交っています。

八王子刑務所は8月13日から8月17日までお盆スケジュールです。面会はOKですが、運動などは休業日スケジュールの室内体操になります。

8月9日 ナガサキ忌。広島市長は触れなかったけれど、長崎市長も被爆者代表も安倍戦争法案にしっかり触れています。安倍は軽々に「非核三原則」を考えていて、広島で述べなかったと批判され、長崎では付け足したけれど、全くその場しのぎ。

8月11日 戦後70年特集の数々の記事を読むたびに戦争法案に危惧を感じる各界、層の人々の広がりや深さを感じます。しかし、安倍首相は以下にうまく採決するかしか考えていないのは、歴然の行動の数々。沖縄との対話ポーズも、国立競技場問題も「70年談話」だっただけで入れたくない「侵略」「お詫び」を入れてでも取り繕って「再稼動」と「戦争法案」は譲らない姿勢はみえみえ。「お詫び」は「みっともない!」と、かつて批判していた安倍首相は入れないまま済ませようとするかも。でも、結局、「沖縄」。安保の名の「自衛隊派兵」「反原発稼動」は聞く耳持たずで、ごり押しです。

「情況」8月号読んでみたら、私の文、「サウジアラビア新王制の覇権」は校正点が25ありました。これはすべて校正表を7月9日に情況社に送っていた箇所です。結局、間に合わなかったのか? それにしては何の連絡もなかったですが。

「8月11日」はアラブに居た時、「8・11党の革命」として、活動の変革を起こした日です。70年代総括としても、活動上の8月11日に起きた失敗を克服することを私たち自身の自己批判的な変革として取り組みました。79年のことです。当時の

それぞれの輝く若々しい顔が浮かびます。

8月12日 グラウンド運動へ。今年は蝉があまり鳴かない。8月3日に、初めて少しミンミンと聞こえて、グラウンドで今日も遠くで蝉の声。この敷地でうるさい程の蝉時雨は、年々少なくなりました。グラウンドから戻って水で顔を洗って、横になりました。そしてできるだけ昼食を一杯食べました。食べると回復します。

8月13日 起床時、久しぶりのしとしとした雨。おかげで涼しい! 昼には、みな期待のカップ入りかき氷(練乳とあずき入り)が出ました。去年は「海の日」でした。今年は、「海の日」にかき氷が出なかったのですが、8月に入ってメニューが回り「13日にかき氷!」と、みんなで語り合っていたものです。おいしかった!

Mさん“炎天下座り込みます原発前”の句通り川内原発再稼動に抗議して闘っています。「8月10日、今、川内久美浜・浜の茶屋という食堂兼休憩所にいます。今日7時までと明日午前も座り込み闘争が組まれています。先ほどニュースで明日10時原発稼動が発表されたとのこと。“浜の茶屋”といえば、みな“ああ、あそこ”と、何も言わずともわかっています。公有地にテントが50~60建っていて闘いの拠点をなしています。経産省前テントといい、辺野古ゲート前といい、テントを建ちあげ、そこを拠点に闘いを継承し発展させるそのエネルギーの何と偉大なことでしょうか」との便り。

ちょうど「情況」8月号の「脱原発川内テント報告」(江田忠雄)を読んだところです。その久見崎海岸、かつて与謝野晶子夫妻も訪れ「久見崎の沙に摘みたる薬草を乗せて我が船蓬萊離る」と歌ったごとく、テントのまわりは草草の芳香を放つ野草に囲まれているそうですね。テント設置に至るまでは、海岸を清掃し、地元の人々共に場が育って行ったようです。「浜の茶屋」で、ずっとその土地の人々と共に、闘っている逞しい姿がとても印象的です。60年代後半の頃「日常の中に闘いをとりもどそう」と街頭戦・党派のエスカレートに異見はありました。実らなかったけれど、今、川内に「多数派」ではないけど実のある闘いがあることを学びます。そう……再稼動は8月11日「原発ゼロ」の2年を裏切って強行されてしまいました。でも、闘いは新しくはじまっています。

8月15日 敗戦降伏を国民に伝えた日。

あちこちから、要求の出されていた「戦後70年の安倍首相談話」を読みました。米国とその同盟諸国に向けた談話です。その割には日露戦争を誇ってたり。ゲームや宝探しのように「キーワード」の「植民地」「侵略」「お詫び」を散りばめて、全く「村山談話」の姿勢とかけ離れたものです。あくまでもアジア、とくに中国には「謝らないぞ」がみえみえ。この談話の行間から本音だけを綴り書きしたら、興味深い文になりますね。嫌いな「お詫び」は主體的な責任と立場の安倍首相のお詫びでないのが、この人らしい。情緒的に開き直り、「言行不一致」の典型は、談話を読み上げたあとの「私たちは歴史に対して謙虚でなければなりません」にはじまる自慢なものの言のタラタラの言葉に示されています。

これで一般庶民を騙して支持率上げて、「戦争法案」「再稼動」と、国民を愚弄しようというのでしょうか。「加害」の立場をしっかりと示さないと意義がないものです。

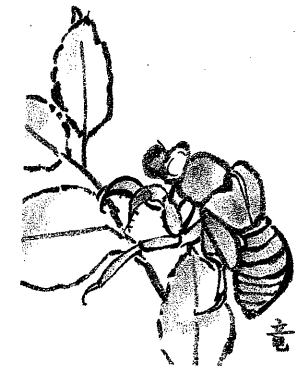
昨日届いた「はなかみ通信」読んでいます。いつもほっとリラックスする知性とユーモアの一冊です。暑中見舞いもありがとう。敬愛する鶴見先生のこと「ご高齢ながら足の手術が成功されて、さあこれからリハビリへ、という時の肺炎でした」と悼んでおられます。

また、同志社学長の村田氏の「公聴会参加・なんたる発信・小中学校の教師を中心に撤回抗議が続いています」同志社にあるまじき発言。安倍戦争法支持とは……。夏風邪は直りましたか? 私は、アラブの年寄りに習った方法で毎年の夏風邪をひかなくなりました。一年中、入浴の終わりに夏でも冬でも両手足顔を冷水ですすぐことです。試してみてください。

8月18日 暑さの続く八王子。お盆明けの今日から平常スケジュールです。もう朝夕の風が涼しくなっています。

友人の便りで、8月10日TV東京の「日系スペシャル未来世紀ジパング」とかいう池上彰番組にメイがレバノン紹介していたとのこと。ネットでも見られるらしいです。

8月19日 人民新聞読んでいたら、ガリコ美恵子さんのイスラエルからのレポート「イスラエル・日本間の新たな軍事協力関係」の記事に注目しました。



去年の天皇誕生日には、テルアビブの日本大使館公邸パーティには、軍上官、軍需産業関係者ら含む130名参加。今年3月のテルアビブサイバー攻撃対策の大見本市「サイバーテック」に、イスラエル軍需産業など150社が出展し、50カ国から8000人以上参加。日本からは10社、ドコモや日立はスポンサー。日本は、共同事業に力を入れ、ソニー、日立、東芝は研究センターを置いているとのこと。戦争当事国イスラエルとの技術共用開発がなし崩しに進んでいます。もっと実態知りたいですね。

8月21日 土曜会の8月の集いのレポート、Yさん、ありがとう。今回は、長編ドキュメンタリー映画「三里塚に生きる」のDVD上映と代島治彦監督のトークもあったのですね。N和尚と代島監督のつながりから実現した上映会です。

小川プロの「日本解放戦線三里塚の夏」(1968年)を撮影した、大津幸四郎さんと一緒にこの映画を撮影したといういきさつなども語っておられて、映画製作を通して、また、上映運動を通して「三里塚に行った」という多くの人に出会い、管制塔を占拠したグループとも語り、「いろいろ垣間見ることもあって、支援者、当時そこに入った若い人たち、そういう人たちの三里塚を舞台にした映画ができるかなと思いはじめている」と語っています。

何か良いものがまた、生れそうです。土曜会は「山形おもいで館まつり」で、柳家三壽の落語や、ピザ窯を設営支援したり、大沼高校演劇部の「シュレディンガーの猫」とその「続編」を、いわきウシトラ旅団と共同支援したり。「安保法制反対集会参加」なども、「柏崎刈羽原発再稼働阻止」の現状報告も、私にとっては、現場が分かりやすく、とてもためになります。

また、8月20日過ぎに土屋源太郎さんをメインにした本を出版すること。「Nさんがインタビュー

オリーブの園 第13号

アーになって、最高裁砂川判決を利用して、集団的自衛権の口実というバカな事を言うので、反論を当事者が語るという形の本だそうです。いいですね。いつも、山中さんレポートは、みんなのスナップ写真付で、とてもいい。

ついでに、NHK BS1の8月7日の米澤さんも出演した、広島への原爆投下のドキュメントから、米澤さんのシーンも送ってくれました。ありがとう。また「安保法案に反対するオール明治の会」の声明も！

8月22日 今日の土曜日の新聞に「石切剣箭神社参道」のただ歩き、ただ祈る「お百度参り」のことが特集されています。ここの由来は、「でんぼ」の神様として有名で、「でんぼ(腫れ物)を鋭い剣と箭で、切り落とす」という連想から「がん封じ」にご利益があるとされ、お百度参りだけで、少なくとも年間10万人以上とのこと。机の中にしまっていたI子さんが前に贈って下さった「石切さんのお札」を取り出して、しみじみまたながめました。I子さんはじめ、お百度を参って下さった友人たちのお蔭もあって、今私の癌も治っているのだ……！と、改めて感謝。いつか石切さんにお礼参りにいかないと！……と思いました。

8月24日 明け方寒くて、毛布を掛ける程になりました。今日は、日中、夏草を一斉に刈っていました。草刈機の音が止んだあと、たくさんの椋鳥と鳩が集ってきました。刈った後の地面を啄んで忙しそうにしています。きっと獲物が草のなくなったあと、啄みやすくなったのでしょうか。午後診察。体調は良好。歯科指名医がまた、近々来るとのこと。

CVポートのフラッシュをして終わりました。

8月25日 朝は冷え込みます。もう一度、台風の後暑さはぶり返すのでしょうか。

今日はなかなか良い本を受け取りました。ありがとう！「報道されない中東の真実」(朝日新聞出版)という本。元シリア大使国枝昌樹さんの著書です。西側、ことに米国の色眼鏡のニュース報道で、ゆがめられて伝えられてきたシリアの情勢について、現場にも行って確かめ、まっとうに偏向報道を正している内容です。丁度、シリア情勢について7月に書いた後ですが、著者の見方に同感すること多です。ただ発行が2014年夏なので、それ以降は記され

ていませんがいい本です。

8月27日 秋晴れのような朝。さわやかな青空に雲がところどころに。お盆の前にグラウンドに出たきりだったので、今日久しぶりの野外です。赤とんぼが塩辛とんぼと一緒に低く飛び、紋白蝶、黄蝶もひらひらして、深呼吸すると気持ち良い日です。

8月31日 寒い日のまま八月尽を迎えています。小雨で先週から今日まで屋外、ベランダ運動もありません。

昨日のニュースで国会前にこれまでに最大規模の人々が集って安倍戦争法案に反対の声をあげているとのことで気になっていました。朝刊をみると12万人が国会から霞ヶ関や日比谷周辺まであふれている状況がわかります。一人一人が自分の意志で小雨の中集っています。

「安保法案反対最大デモ」の記事のタイトル。不幸なことに安倍政権、自民党は法案採択や成立の為の策ばかりを考え「沖縄問題」のポーズ同様、実体は強権が迫っています。友人の中に「学生たちがハンストに入り現在それ以外考えることが出来ません」と熱い関りの60年代に学生だった人の声も。「戦争法案廃案！」これまでのぎりぎりの憲法解釈(これまでも十分憲法違反といえるが)が決壊したとすると「何でもあり」は目に見えています。「これまで平和」というけれど、沖縄の犠牲の上に成り立っていることを、そしてまたこの国会への抗議行動の市民と同じようにそれ以上にこれまでの反戦を闘って来た人々の力があつたことを忘れない日としたい。イスラエルのガザ攻撃によって殺され、破壊されて、すでに一年経っているのに今も復興の資金も決如し、10万人が避難生活のパレスチナ。ISは衰えもせず空爆下で日々市民が殺されています。不条理あふれる八月尽。

9月1日 「梅雨じり」のような9月のはじまり、秋雨前線とか。友人たちの便り、みんな各地で8・30戦争法案反対に力の限り闘っていたのがわかって、何も出来ずにあれこれ頼むばかりの身が辛い。東京、関西、神奈川の友人たちの姿がうかびます。東京は小雨の中関東以外の参加者も多く、関東からの参加者は日比谷エリアから決まった時間にシュプレヒコール。国会前へ行く途中「脱原発テント」まで着くと、もう国会前は満員とのこと。人が多すぎ

危険で車道も解放され倒されないよう注意して牛歩。シュプレヒコールがあちこちといたすごい人の波の中の抗議行動を友人が伝えてくれました。国会前で「明大土曜会」の幟が輝いていたようです。

関西もすごい闘いだっただけでしょう。Kさんもデモに行かれたのですね。各地で一人一人が闘っている様子が強く感じられます。(愛犬のやさしげな写真、野菜や美しい花が咲き誇っていますね。)10月17日に彼の七回忌を昔の同志社の仲間がやってくれるのですね。変わらない友情、そして10・18は反戦集会ですね。

中東では益々戦乱が拡大しているようです。トルコは11月1日に再選挙を決めてクルド勢力を叩きながら過半数再獲得をめざそうとエルドアンの大膽なギャンブル。対ISの有志連合に参加して米欧批判を封じつつ「反テロ」で国内やイラク、シリアのクルド勢力攻撃のキャンペーン。国内親IS勢力や軍の動向など益々不安定な様子。

シリア「アサド政権を追いつめた」スンナ派サウジを中心とする国家も先にISを叩くのか、アサドを打倒するのか戦略が問われている様子。5月には「反体制勢力と協調する」「西側を攻撃しない」とアルジャジーラでわざわざ「宣言」したヌスラ戦線のリーダーのショウラーニー。でも7月下旬には米軍が育てた対ISの最初の軍団を「第30軍団」と名付けてトルコ国境沿いの「安全地帯」に配置したところ、すぐにヌスラ戦線に攻撃され、空爆で反撃しつつも指揮官ら数人を拉致されたとのこと。「米国と

ともに行動するグループは認めない」と「正体を現した」とか。ヌスラ戦線は勢力拡大し「アサド打倒」にむけて戦略的な再編の動向に楔を打ち込もうと考えてのことなのだろうか。

「昨日の友は今日の敵」はまた「昨日の敵は今日の友」でもあります。それは中東が常に欧米の植民地支配介入を受け、分断支配されてきた歴史の土壌がつくりだしてきた「生き残り」をかけた戦術展開で、中東では悪いことではないと考えられています。その分「アサド政権打倒」第一戦略を唱えるイスラエル、ネオコン、トルコ、カタール、サウジ、ヌスラ戦線、シリア反体制勢力の変化はありえますね。

「IS」第一戦略は国内IS勢力のシーア派への自爆攻撃で足下に火のついていっているサウジも取りたいところ。最後は「政治的な粹」に収斂するのが戦争。シリア民衆、イラク民衆のためにも軍事アクセス、軍事解決の転換を！と考えるばかりです。

本当にあつという間に9月。生活の中で闘っている友人たちに比して、私の何とも「安全」な環境とはいえ自由への渴望抑えがたく「戦争法案廃案」の闘いに一喜一憂しています。

9月2日 午後から久しぶりに青空がのぞいています。明日からは屋外運動可能かもしれない。

友人より天候不順につき体調配慮を、と頂きました。友人たちの日々の大変さ、病気のこいろいろ気になります。名残りの暑さがこれから続くでしょう、ご自愛を！

★読んだ本★

(「日誌」の中の読んだ本への記述を編集室が抜萃したものです)

重信 房子

「テロルと映画」(四方田犬彦著・中公新書)を読みました。この本では「映画はテロルをどのように描いてきたのか」を分析し総括し「テロリズムと映画」の関係のみならず、その社会性、芸術性、さらには作成者らに貫かれている思想性をも洞察しながら「テロリズム」を問い、その廃棄の可能性を模索しています。

「まえがき」でテロリズム(暴力)の映像が人間に恐怖と不条理を同時に体験させるが、二つのことを忘れてはならないと記しています。「私が本書を執筆するにあたって出発点にしたのは、この二つの認識

である」として、一つはテロリズムが常に映像メディアを媒介として、スペクタクルの形態をとるという事実、その演劇的表象として世界中に恐るべき速度で伝播されることで目的を果たすこと。もう一つは「後になってテロ事件を想起する場合に起きる障害である。テロリズムの印象がつねに映像によって大きく影響され、固定されてしまうために、人は現実に生じた事件と映像との間に境界線を引くことが出来なくなり、虚構の映像をしばしば事件の事実だと記憶してしまう」点をあげている。

そして第1章では「テロリズムとはスペクタクル

化された暴力である」という立場から72年のミュンヘンオリンピック「黒い九月」事件を検証しています。

この第1章で示された見方を深める形で第2章では「ダイ・ハード」の善良なアメリカ白人が勝利し悪が滅びるといふ映画と「天国の長い道」というバリ島でおきたイスラムテロの映画が示す勧善懲悪図式でテロは解決出来ない、の比較検証。

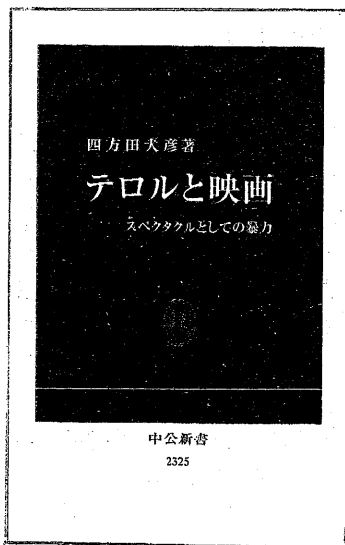
第3章ではテロリストを主人公としたフィルムをあけて「テロリスト」の内面を主題とした映画2012年の「カルロス」や「パラダイス・ナウ」(パレスチナ人ハニ・アブ・アサド2005年)を説明し、

第4章から第7章まではテロリズムに真剣に向き合おうとした4人の映画監督(スペインのルイス・ブニェル、若松孝二、ドイツのライナー・ヴェルナー・ファスピンダー、イタリアのマルコ・ベロッキオ)をあげています。

そして終章ではテロリズムを前に映画がないうる服喪の行為について記しています。

この本の中では実際に起こった事件を映画としたもの、またはハリウッドの映画スタイル、または現実を告発するために映像化された暴力、テロリズムの主体の側の思想を映像化したものなど、多くの映画が比較検証されていきます。読みはじめて革命や解放の暴力もひとくりに「テロリズム」として並べられていることに当初は「違和感」が私にはありました。

また「ミュンヘン事件」についても「カルロス」についても、作られた映像作品に当事者から否定的な怒りが表明されているのを知っている分「映画は



映画でしかない。それ以上ではない」という考え方もありました。それに、映画を見ない(見られない)私には、この映画、映像を通して語られる論には感想はむずかしくて書けそうにないと思いました。

それでも、当事者たちの意見

は描いて、社会の中に「武装闘争」を現代でとらえると「テロリズム」というのが一般化している以上、あえて「テロリズム」と括ることによってそれを問うという著者の真意もわかります。第1章には全体を貫くそうした政治性も明確にされています。

その中で「わたしが目にした、もっとも新しいテロリズムの定義は、2013年に日本の安倍晋三首相が国会を通過させた『特別秘密保護法』によるものである。『政治上その他の主義主張に基づき、国家若しくは他人にこれを強要し、または社会に不安若しくは恐怖を与える目的で人を殺傷し、または重要な施設その他の物を破壊するための活動をいう』権力の文体の典型ともいべき悪文であるが、この定義を踏襲するならば、靖国神社での参拝を強要したり、『君が代』斉唱を教育施設で強制する行為も、それが人に不安や恐怖を与えるかぎりにおいてテロ行為認定されることになる。

だがこの曖昧にして不明瞭な定義こそが、国家が自在に人間を拘束し処罰できるように重要なのであって、『テロ』の観念はそのために恣意的に用いられている」とし、誰がそれをテロと呼ぶのか?

更に著者は述べる。『「テロリズムとは何か?』という問いを、次のように訂正しなければならない。すなわち、ある事態なり人物組織がテロリズムであると呼ばれるとき、それを命名しているのは誰なのか。テロリズムが現象への客観的な命名ではなく、どこまでもその現象をめぐる解釈であるとするならば、その解釈者とは誰なのか。……われわれは日常に氾濫している『テロリズム』という言葉を検討していかなければならない』という言葉に、敢えて「テロリズム」と括る意図が示されていると思います。

そのように映画を知らなくても、いくつもの点で学び共感することができます。パレスチナ人監督レイマンの「殺人というオマージュ」から「テロリズムを名付け直す」が特に胸に迫り印象的です。「テロリズムを名付け直す。テロリズムと呼び直す。それをもう一度、テロリズムと呼び直す。動かないものを動くものに変えるために。ものを、すべてのものをテロリズム呼んでやろう。人々を、多くの人々を、誰も彼もテロリストだと呼んでやろう。ぼくたちがもう一度、人々になれる時がくるまで。ぼくたちがもう一度、テロリストになれる時がくるまで。」(映画の主人公が最後にコンピューターにこう書きつける。)

「恐ろしい、逆説的な表現に満ちた言葉である。ここにはイスラエルにおいて、また留学先の

アメリカにおいて、テロリスト民族と呼ばれ、孤独と屈辱に塗れていた若き映画人の苦しみ、ひりつくような皮肉のもとに語られている」と著者は記している。

「テロリスト」という言葉を口にするによって生じる暴力。テロリズムをめぐるステレオタイプの認識に決然と否をつきつけている逆説は、パレスチナの友らの叫びを私に想起させます。

また、終章では「革命の子どもたち」や「幽閉者」にも言及しています。この終章の「哀悼的想起としての映画——テロルの廃絶に向けて」でこう述べています。「映画の役割とは、ベンヤミンの説く歴史に似ている。それは哀悼的想起を組織することである。それはテロリストをめぐる世界に散乱している悲嘆を掬い上げ、纏め上げ、哀悼という視座のもとに世界を認識し直すことにほかならない。」

そして「あとがき」で語っています。「テロリズムは現在、世界のいたるところで生起している。……われわれは一方でテロリズムに恐怖し、もう一方でテロリズム対策を理由にした国家の監視システムに、強い閉塞感を感じている。」そうした世界にあって「われわれは潜在的に犠牲者であり服喪者であることを、あらかじめ宣告されている。」こうした状況の中で「わたしがまず求めたのは、テロリズムを見つめ、その克服と解決を真剣になって考えてきた監督たちの試行錯誤の跡を辿ることであつた」と。

映画の中のテロルは虚構でありながら社会を反映し、それはまた作り手の「アジエングセッティング」や「フレーミング」によって思想化されて、社会に戻される。著者が「まえがき」で述べた二つの認識の出発点とは、また映画にかぎらず、日々のメディア、ネットやテレビで視聴される「スペクタクルの伝播」と「虚構の映像を事件の真実として記憶されているのではないか」と思い至ります。「作り手の思想」を読むこと「誰が誰をテロリストと呼ぶのか?」を鋭意に探る視聴者の側こそ育たねばならないと深く思いました。(7月5日)

「歌集『暗黒世紀』坂口弘」を読みはじめました。はじまりの章「冬の花火」に2000年の歌が集められているのですが、読みはじめて胸を衝かれぐっと涙をこらえる想いです。はじまりから哀しい。「二〇〇〇年一月一日午後一時弁護士辞む

ると怒りの手紙きぬ」
「弁護士に去られし吾に追打ちのく思知らず」なる誌上批判あり”
“何やらむ冬の小菅の夜の空に数十発もの花火上がれり”
この三首がまず最初の頁にあります。

坂口さんにとって2000年というのは「二



〇〇〇年六月に裁判のやり直しを求め、再審請求の申し立てをしました(あとがき)とあり、また同年11月8日、私は日本で逮捕されました。「冬の花火」の頃、私はまだ逮捕前ですが、のちに同じ獄という環境に在った分、これらすべての歌を生活史として読み、また実感するので、感情が溢れてしまうのです。獄の「死刑確定囚」の孤立感の中で弁護士とどんなやりとりか分かりませんが、驚きと苦しみにもう一人の自分が直視して詠んでいる姿がうかびます。

その後の方に「待ちまちし弁護受任をしらせくる電報をおし頂きて見る”
“銭すこし差入れせむかと言ひくるるさても情ある弁護士さんかな”と詠んでいて、やっど心開ける弁護士に出会えたことにこちらもホッとします。

そんな心境を経ながら再審にたちむかっている時、私の逮捕を知ったようです。“驚きもちてニュースを聴きてをり重信房子が国内逮捕と”
“昨日ありし重信逮捕は触れもせで朝まだき母は面会に来つ”と詠んでいます。続いて“文春誌になほ屹立せる重信の父君の書きし達意の文かな”
“<日本赤>と言ひてラジオは切られけり七十五年八月四日午後”など。父を詠んでいたのを知って、また涙が迫りそうです。父が当時の激しい非難糾弾の中で「重信房子の父として」と月刊文春に私を弁護する一文をよせました。はたちをすぎた大人が「確信犯」で行っていることで親を非難するのはおかしい。かつての戦前の赤狩りのような風潮」と淡々と記していました。それを思いだし、また坂口さんがそれを目にとめて刻んだ心根に嬉しくなっていました。

さらに坂口さんは私の逮捕から、かつて奪還闘争

オリブの嶺 第31号

に自分が指名され、拒否し、現在があることを振り返りながら、その時のことも詠んでいます。「沈黙の間をしばらくは置いて言ふ<出国はせず>とただの一語を”出国する者ら思ひて明けの空遠ざかりゆく爆音聞きをり”

坂口さんは「あとがき」で次のように記しています。

「再審請求を申し立ててこれまでの暮らしに区切りがついたため、過去を振り返ってみました。遠い昔に、過激な路線ともまた組織とも手を切り、その結果として出国拒否にいたったこと(1975年)、一番死刑判決(1982年6月)と同判決をめぐる出来事、そして長年の間筆者を支えて下さった恩ある方への追悼などを取り上げ作品化しました。

また昔からの牢の暮らしの折折の感慨も歌に詠んでみました。

幼稚ではありましたが、政治闘争をした端くれとして、またマルクス主義は放棄したものリベリストでありたいとする願望から、政治問題に対する関心をなくすことができず、アメリカによるアフガン戦争とそれに続くイラク戦争に関わる素材を極めて少数ではありますが、取り上げて作品化しました。

本歌集が扱った8年間(注:2000年から2007年)、死刑執行は空白をつくることなく、毎年判で押したように着実に行われました。当事者として嫌でたまらないこの素材は、できることなら避けて通りたいと願っています。しかし、そうしたらこの歌集は価値が半減するでしょうし、何よりも国により生命を絶たれた人々への申し開きができません」と。

さらに死刑制度批判、本歌集のタイトルの説明をしています。

「このタイトルは、実は歌集の内容を反映したものではありません。それは新世紀である二十一世紀を特徴づけるのにふさわしい言葉として、筆者が選んだものなのです。「それは人類に束の間の繁栄をもたらしたはしましたが、本当は人類を滅亡に導く呪うべき文明なのではないでしょうか?」と産業革命以来の産業社会批判としてタイトルを示しているとのことです。

2000年から2007年までの作品334首を収録して「跋」は佐佐木幸綱氏が2007年の歌集「常しへの道」に続いて記しています。そして佐佐木氏は母をうたう歌を特に評価しておられます。

“縮みたる母の身体に縮まざる大きな双手がいつも

目に付く”など六首をあげ、「坂口の歌はどれもまなざしがやさしいが、母をうたう歌は特にやさしい」と評し、坂口さんが2007年で歌を終わらせたことにある区切りの意味があったのではないかと思わせられるとして、2008年93歳で母菊枝さんが他界されたと記しています。「著者は、母の死を、自分の人生の大きな区切りと考えたのだ。そう思いつつ、私はあらためて坂口の母の歌を読みかえし、人生というものを思うのである」と跋文を結んでいます。

どの歌も自分の暮らし、心境をさらけ出し、時には悔・感謝を、時には憤りやこらえがたい思い、そうした自分を切りとるように詠んでいて「坂口弘」という人がどんな人なのかがわかるような気がします。

2000年の「冬の花火」に続いて詠まれている歌から私の心に残ったものを記していくと以下です。

「新世紀」2001年 “弁護士にわれ恵まれて存へたり恵まれず逝きし死囚多かり”。

「国民の敵」2002年 この年は佐々淳行原作・役所広司主演のあさま山荘事件の映画が宣伝された年です。「紙をくれればわれに攻めくる機動隊のあさま映画の大広告あり”名指されて<国民の敵>と役所氏の指弾受くるとは思はざりしかな”佐々書きし過誤あまたなるあさま本をべた賞めしたる作家もあるかな”人質を利用して逃ぐる企ては左翼なればこそ思はざりけれ”一方的なストーリーに対する静かな怒りが詠まれています。

「新獄舎」2003年 “国家より死ねと言はれて十年経ぬ十年経しかと今さら思ふ”判決にて<自殺もせずにおめおめと逮捕され>とかく嘲けられしかな”総身より血の気が引きて総身を死のホルモンのごときが満たしぬ”(一番死刑判決をいひ渡されて)“死囚なる身分となりてしばらくは地に足のつかぬ生活をしたり”“逆立ちを二年ぶりにせり水流の錆びし鉄管にほとばしるごとし”

「ときの淘汰」2004年 “小菅の空仰げば思ふ虹を見たし一度なりとも見たしと思ふ”亡き指導者がわれを誘はむと掴む手を怒りて払ふつづけて見し夢”

「派兵」2005年 “屋上に逆立ちすれば足うらに冬の陽あたりこころ温もる”(私がこの歌集で一番好きな歌です。)“イラク派兵かくも安易に決めたるをいつか悔い深く省みをすべし”

「水琴窟」2006年 “あらざるにわが子の名前

を考へをり死刑囚にして独り身のわれが”ああ便器水琴窟となりぬらむ満れる水の音のすがしさ”“上告をわれに促さむと三日続け小菅に来たまひ驚かさぬ”“三十八年われにより添ひてをりをり助言してくれ給ひき”

「生存死刑囚」2007年 “人生の節目のをりも正装して過すことなき人屋の生活”“新聞に生存死刑囚と書かれをり魂すでに亡きがごとくに”“落ちこめるときわが本の苦しがる総括場面を読み癒せる”“なりたきは総理と書きて笑はれし小学四年のわれなりしかな”“何ありともこの花のみは裏切らぬと金木犀の香を深く吸ふ”

昔の闘いの日々、更には公判での様々な難しさ、奪還を拒んだこと、そして獄での思索と作歌、想像しきれないことももちろん多いですが、身につまされることもまた多々あります。強く心に響く歌集です。

虹みたしと拘置所の狭き空仰ぐ

坂口弘の暮らし哀しも

(7月22日)

「冤罪とジャーナリズムの危機」浅野健一ゼミ IN 西宮報告集(鹿砦社)を読みました。浅野健一さんが一年間の間に、公開ゼミを6人の方々と対論しながら行った、その記録です。

浅野さんはジャーナリストとして、また、同志社大学教授として、常に権力を監視する観点で、メディアのあり方を問うて来られ、「救援」紙でも連載されています。「犯罪報道の犯罪」など著書多数があり、この本では、特に対論者と共に、冤罪がどのように作られていくのか、そこでジャーナリズムがどのような役割を果たしているのかを、具体的な事件を問いつつ、明らかにしているものです。

第一回の対論者は「甲山事件」の山田悦子さん、第二回は「松本サリン事件」の河野義行さんと、冤罪を負わされ、それと闘いながら無実を明らかにした当事者たちです。第三回は、安田浩一さんと在特会とヘイトスピーチ排外主義とはどんな実態であり、「外国人研修制度」の名で、どんな無法や迫害があるのか、日本人の問題・権力・メディアの問題を対論しています。第四回では、週刊「金曜日」編集長の北村肇さんとは、権力チェックを忘れたメディア

ア・報道機関の現実と、どのように変革・再生を求めて闘っていくかを熱く語り合っています。第五回では、安田好弘弁護士が「加害者弁護士」として「悪魔の弁護人」と呼ばれながら、法廷を闘いの場として加害者の生きる権利を訴え、

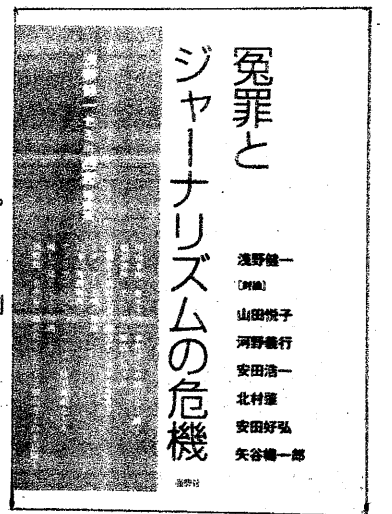
また「死刑廃止」にもずっと取り組んでこられた様子が語られ、また麻原彰晃被告弁護人として、安田弁護士自身が「別件逮捕」で妨害を受けながらも、多くの弁護士と権力を反包囲しながら闘い続けたことも語られています。第六回は矢谷暢一郎さん。オランダの学会からの帰途ニューヨークのケネディ国際空港で、86年突然逮捕され、44日間拘留されながら全米の「人権」「反差別」の抗議で釈放された経験を持つニューヨーク州立大学教授。矢谷さんについては、私も前に「書評」を書きました。

以上のように、権力側の一方的な思い込み捜査、それを維持するための巧妙なやり口。特に権力に無批判、または忖度していくメディアのあり方、その中でも闘い続けることによって道がつけられていくこと、各々の方々の生き方、信念にたくさん共感と学習すべきことがあります。

私自身も冤罪だと公判で訴えながら、検察の一方的なシナリオにおもねて判決を下す裁判官には怒りが湧いたものです。そんなことを考えつつ、現在の権力とメディアのあり方を考えさせられる本です。

この本の多くを語りたいのですが、一つだけもともと胸を打たれた河野義行さんの話を、そのまま記すことにします。

のちに「松本サリン事件」と呼ばれますが、6月27日に事件が起こりました。妻は心肺停止、河野さんと長女は重症、5人家族の4人が入院し、高校1年になって間もない長男だけが家にいたそうです。当初、被害者であり第一通報者で、名前がすでに出ていたのですが、事件発生翌日、河野宅からいろいろ押収し、「長野県警はマスコミの影響とかを考えて



匿名で(押収捜査を)発表する予定だったんです。ところが、上級庁つまり警察庁が『実名発表しろ』と指導してきたんです」という結果、いやがらせや無言電話がひどい状態となっていた。

河野さんの話「他の家族は皆入院していました。長男が一人で電話対応していました。長男はいやがらせの電話に悲鳴を上げて、『とてもじゃないけど耐えられない。電話番号を変えてほしい』と言ってきたんです。しかし私は変えることに反対しました。電話番号を変えるということは、現実から逃げるといふ行為になります。それで長男に言いました。『ここで逃げたら、うちはおそらく世間から潰されるぞ。いまうちがやらなければいけないのは、どんな電話に対しても正面から真摯に対応する、それが必要なんだ。』

以降、長男はすべての電話に対して『あなたは、おっしゃることがないようなので、この電話を切らせていただきますよ』と、きちんと断ってから切っていました。『人殺し!』とか『街から出ていけ!』という電話もずいぶんかかってきたのですが、それには『どうしてあなたはそう思うのでしょうか? よかったらお父さんに会って話をしてみ

ませんか。お父さんはあなたにお会いしますよ』と答えると、ほとんどが一方向的に切られてしまいました。

つらかったらうけど、長男はしっかり対応してくれました。逃げたい時ほど逃げないということは大事なことなのですね。人間は、一度逃げると次々に逃げざるをえなくなってしまうんです。そこで私や家族が、どうやって心のバランスを維持していたかという、心の位置なんです。自分たちは悪いことを何もしていないのに、そういう嫌がらせを受ける。それは、嫌がらせをしている方が悪い。それならば、自分たちは心の位置をその人たちよりも少し高くして、何を言われても、何をされても許してあげる。そういう位置に心を置いて、普通に生活していこう。こう決めたわけです。心の位置というのは、圧倒的に不利な状況であっても、上げることが出来るということです」と、述べています。

同じように激しい嫌がらせ電話を受けながら、同じように対応していた父も、また共通した信条があったにちがいないと思いつつ、河野さんの教訓をかみしめました。(8月1日)

「イスラーム国」と宗派戦争(上)

重信 房子

1 カリフ制国家宣言——「イスラーム国」の登場
「イスラーム国」(以下IS)とはどんな勢力なのか?

彼らは2014年夏、イラク第二の都市モスルやサッダーム・フセイン元イラク大統領の故郷ティクリートを含むイラク北西部を制圧した。そしてシリアの北西部ラッカに首都を置く「カリフ制国家IS」を宣言した。西側報道機関は、これまでイラク軍や反アサド政権の「自由シリア軍」などをことさら過大評価し、いわゆる「アルカーイダ系勢力」を過少評価して報道してきたので大いに驚いた。この時点でISの支配地域内には600万から800万人の住民が暮らし、12ヶ所の石油施設があり、支配地域内では住民や事業者から「寄付」「税金」を徴収しているという。2012年からシリア東部の石油施設を支配しており、今ではシリア産油能力の60%にあたるという。日産8万バレルの石油生産能力(一日の売上げ800万ドル)、管理する資金5億ドルほどで、政府・軍事評議会・宗教警察、給与支払いに至る行政機能などの国家統治システムを備えているという。モスル攻略では中央銀行などから現金を調達し、イラク西部の主要幹線道路の通行に検問を設けて、人や商品の移動にも「課税」しているという。

ISの首都、穀倉地帯のラッカでは生産される綿花や小麦の収入などからの課税も行い、食料配給所を作って貧困者には無料で配給し、孤児のための相談所を設けて「養子縁組」を仲介しているという。また自己資本を投じて保健・医療プログラムも提供し、住民にはポリオワクチン接種を呼びかけ施し滞りない日常生活条件にあるという。そして6月29日、イスラームの聖なるラマダーン(断食月)の初日に、「カリフ制国家イスラーム国」として「国」の装いをもって登場した。そしてラマダーンの初金の曜礼拝の7月4日、初めて公の場にカリフが登場し、厳かに説教をはじめた。

この登場と時を同じくしてイスラエル軍はパレスチナガザへの空爆を開始している。7月2日、パレスチナの16歳の少年がユダヤ人入植者たちに拉致され焼き殺された。7月4日、この少年の葬儀を契機に、パレスチナの抗議は全土に広がり、ガザ地

区からも抗議のロケット弾が発射された。イスラエル軍は「自衛」と称してガザ地区への空爆を開始したのである。ガザ空爆は周期的なイスラエル政府による「民族浄化」政策であり、「自衛」に名を借りたパレスチナ人虐殺である。この空爆と侵攻によって、8月末のイスラエルとハマスの停戦までの間に2143人の住民が殺され、負傷者は16000人を越え、10万人以上の人々の家が日々破壊されていった。

こうした国際法無視のイスラエル国家犯罪には有効な手が打たれなかった。イスラエルの空爆が続く8月、それを放置したまま、米国政府はISにわかにかげりを感じ、IS支配地域を8月8日から空爆しはじめた。9月に入るとNATO首脳会議、国連安保理決議など矢継ぎ早のIS対策をうちだした。それに乗じて、イスラエル首相ネタニヤフは、9月国連総会で「ハマスはISISであり、ISISはハマスである」と演説してガザ空爆を正当化した。米軍ら対ISの「有志連合」の空爆は、ネタニヤフによってイスラエルによるパレスチナ人虐殺の具に使われた。

2015年1月には、日本の安倍首相の不用意な発言を利用して「十字軍に連なった日本」の政策を批判し邦人人質を殺害した。1月段階で米軍らの対IS空爆は2000回を越えたという。しかし空爆は逆にISの「勇敢さ」「自己犠牲」「英雄性」を鼓舞させたようだ。ISは現代のテクノロジーとソーシャルメディアを駆使し、ハリウッド映画顔負けの演出による政治メッセージを発しているという。「今やジハードが始まった。イスラームの声を聴くがいい。イスラームは自由をもたらす」と。「アラブの春」といわれた民衆蜂起が、旧い独裁権力に立ち向かいながら力によって壊された後には、ISの声は希望と聞こえるのだろうか。または資本主義の金による支配、商品化された個々の疎外感、差別、文化的違和感に失望するイスラームの若者たちには、絶望の前の希望に聞こえるのかもしれない。ISに参加を求める若者たちの数は、国連や米・英資料の数値でも日を追うごとに増加を示した。国連制裁委員会が安保理に提出し公表された最新の2015年4月1日のレポートによると、2万2千人の外国人戦闘員

130号の誤植の訂正とお詫び

校正漏れが多くて申し訳ありません。一部に「読んだ本」の著者による校正・校閲を加えたために、増えた面もあります。

- | | |
|---|-----------------------------------|
| 2頁8行 阿部政治→安倍政治 | 18頁右列6~8行 革共同の~権利がある→「革共同の~権利がある」 |
| 5頁左列10行 海兵隊使用→海兵隊仕様 | 18頁右列14行 革共同ならざる革協同→革共同ならざる革共同 |
| 5頁右列下から8行 ジャミール首相→シャミール首相 | 18頁右列20~21行 人々の→人々への |
| 6頁右列12行 学者の道→学舎の道 | 18頁右列下から18行 名である→である |
| 6頁右列下から10行 安倍をつまんで改憲する流れは流れは→安倍とつるんで改憲する流れは | 18頁右列下から18行 惨殺→虐殺 |
| 8頁左列14行 高専→光線 | 18頁右列下から17行 会えて→あえて |
| 11頁左列下から8行 「緊急財政反対」→「緊縮財政反対」 | 18頁右列下から15行 重大な誤り→若干の重大な誤り |
| 11頁右列下から6行 血糖検査矢印血液検査 | 18頁右列下から14行 話して→記して |
| 12頁左列15行 アイネ・ヘルウェ→アイネ・ヘルウェ | 18頁右列下から6行 各共同→革共同 |
| 13頁左列14行 和田和弘→和田和宏 | 18頁右列下から4行 千葉主義→千葉唯一主義 |
| 13頁右列下から17行 そえは→それは | 18頁右列最下列 70年華僑→70年、華僑 |
| 16頁右列下から9行 ムバラーク→ムバラク | 19頁左列7行 血債主義→「血債主義」 |
| 18頁左列8行 2014あるいは→2014—あるいは | 19頁左列12行 、三里塚第二期→三里塚二期 |
| 18頁左列9行 岸広→岸宏一 | 19頁左列17~18行 政治軍事→政治・軍事 |
| 18頁左列下から14行 執筆動機を→執筆動機と | 19頁左列下から9行 紳士に→真摯に |
| 18頁右列3~4行 どうしても書いておかなければならぬ | 19頁右行下から21行 高橋幸吉→高橋孝吉 |
| い→「どうしても書いておかなければならない」 | 19頁右行下から20行 震えた者→震えたもの |
| | 20頁右列3行 ところにも→ところも |

が約100ヶ国からシリア・イラクに潜入し、ISやアルカーイダ武装集団に参加しているという。シリア・イラク以外でもアフガニスタンに6500人、イエメン・リビア・パキスタン・ソマリアで数千人の外国人戦闘員が加わっているという。

米欧政府中心にさらなる空爆、軍事力でそれらを潰そうとしている。加えて米欧の政府の意向を受けた諜報員たちの暗躍、さらに米軍を退役した「民間人」資格でISと闘うキリスト教系民兵部隊もトルコ・クルド地域に集まってきている。さらに米政府は「穏健な反体制派」に「新シリア軍」と名づけて、対IS対アサド政権軍の地上部隊を育てはじめた。2015年末までに3000人を育成し、以降毎年育てるといふ。生活苦のために集まる者はいても、それらの人々の多数は、また反欧米のIS予備軍と化すだろう。戦争は兵站力と人の要素、さらに言えば戦略戦術によって決する。物量作戦の軍事制圧は、しかし何の問題も解決せず、戦乱を拡大することにしかならない。なぜなら、過去の不公正な中東の歴史が、今、混乱と戦乱を噴出させているのだから。民衆の長い反植民地斗争、民主化と民衆蜂起の敗北の変質過程として「カリフ制国家IS」の登場があると見ることもできる。

2 カリフ、アブー・バクル・アル・バクダーディー

2014年7月4日、アブー・バクル・アル・バクダーディーはカリフとして初めてイラク北部モスルのグランドモスクに登場した。そこで「サイクス・ピコを葬る」と宣言したのだが、この時、バクダーディーは次のように述べたという。「私は、あなたがたを統べるワリ（指導者）である。しかし、私が最もすぐれているわけではない。私が正しいと思ったら、手を貸してほしい。私が、まちがっていると思ったら、私に教え、正しい道に戻してほしい。私があなたがたの中の神に従う限り、あなたがたも私に従ってほしい」と。ロレッタ・ナポリオーニ氏（対テロ専門コンサルタントであり、『イスラム国テロリストが国をつくる時』の著者）は、「これは野蛮なテロリストの言葉ではない。聡明で現実主義的な宗教指導者の言葉だと言えよう」と評価している。その言葉で人々を魅了したカリフ・バクダーディー。しかしそうした謙譲と寛容の哲学は現実のISとどこかかけ離れていないか？

バクダーディーは1971年、イラクの古都サマラ

に生まれた。預言者ムハンマドの末裔だと称しているという情報もあるが、確かなことは、預言者ムハンマドと同族の「クライシュ族」に属していると自称し、また認められているということ。宗教家の家系に生まれ、バグダッド大学でイスラーム神学の学位を取得しており、バグダッドやファルージャでイスラームの指導者として活動していたという。2004年から05年から4年間、イラク南部の都市、ウル・カスルにある米軍収容所に逮捕収監されていた。この時に収容所でアルカーイダ系勢力を含む仲間と親しくなったという説と、もっと以前に、イラクにアルカーイダをつくったヨルダン人、アブ・ムサブ・アル・ザルカウィーの仲間であったという説もある。いずれにしてもISの登場と共に、彼はカリフ制国家を宣言し、そのカリフとして立った。

「カリフ」というのは、預言者ムハンマドが632年に没した後に、ウンマ（イスラーム共同体）の決定によって選ばれた「神の使徒の代理人・後継者」のことである。つまり全世界のイスラームの指導者である。（イスラーム人口は世界で16億近いという。イスラームが国民人口の多数を占める中東・北アフリカには3億2千万人、パキスタン以東のアジア太平洋に9億7千万、アフリカに2億4千万人暮らすという。）初代カリフはアブー・バクルとなった。このカリフの後継を巡って、のちにスンナ派とシーア派が分かれることになったが、第31代のカリフがオスマン帝国の崩壊で退位し、以降は正統なカリフは存在しないままだった。「イスラーム」という言葉は「平和」の意味であり、転じて「神への帰依」神の摂理のままに生きることを示している。「クルアーン」（日本では「コーラン」と表記されてきた）は、神が預言者を通して啓示された命令であり、掟であり、法である。そのもとに生きるのがイスラーム。「クルアーン」と預言者ムハンマドの言行録にある教えを「ハディース」と呼び、イスラーム法（シャリーア）の法源としている。

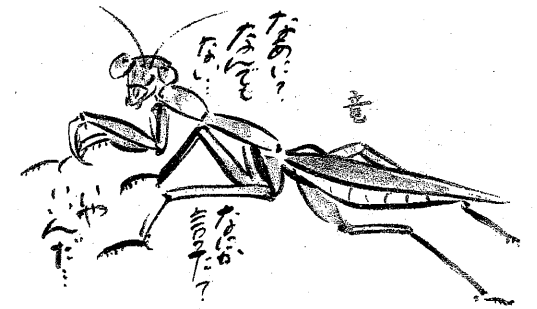
イスラーム法学者の中田孝氏によると、「カリフ制の本質とは、大まかに言うと法の支配。正確に言うと、自然法の支配です」と述べている。「法の支配」と「法治主義」はまったくちがうもので、「法治主義」は国家が定める法律を至上のものとする発想であり、イスラームの法の支配とは「それとは逆で、自然法の下に国家を置く、という思想です」。そのため、自然法に反するような各国法を否定する。自然法の支配がカリフ制だということ。自然法が認める

人権法は当然認められると述べている。イスラームにとって、カリフは宗教的最高権威のみならず政治指導者であるのは、イスラームが信仰によって結びついた共同体（ウンマ）を前提にして、どう生きるか、どう社会生活を営むか、宗教と政治は別々ではないためである。「シーア派の思想では、本来あるべきイマーム、つまり指導者と、実際の権力者が違うときは、本来あるべき指導者の方が正統性を持つという考え方です」と、中田氏が述べているように、イランの政治と宗教指導者の関係をとらえることができる。「これに対して多数派であるスンナ派は、そもそも政治的な指導者というのは、定義上、権力を持っているものなので、権力を持ってなければ、それは政治的な指導者ではないと考える。どういう手段であれ、権力を握った人間が正統な指導者だ」という中田氏の解説を知ると、ISのカリフ・バクダーディーの野心もうなずけるものがある。

初代カリフ、アブー・バクルは人格的にも人々に慕われた指導者であったという。初代カリフに推されて立った時、アブー・バクルは次のように言っている。「私が、正しければ私を助け、私が誤りを犯せば私を正してください。」「私がアッラーと、その使徒に従う限り私に従いなさい。もし私が、アッラーと、その使徒に背いたなら、あなたがたには、私に従う義務はない」と。この初代カリフ、アブー・バクルは、歴史的に証明されているように謙譲の人であり、寛容の哲学の人であった。この事実を知り、ISのバクダーディーをとらえ返してみると、ナポリオーニ氏が言うような「聡明で現実主義的な宗教指導者」という評価には疑問がある。なぜなら、「アブー・バクル」の名前も、そしてカリフ就任の2014年7月4日の登壇演説も決してオリジナルではなく、初代カリフ、アブー・バクルをコピーしているのだから。それはまた、バクダーディーの一つの忠誠の姿勢として評価する者もあるのだろう。しかし、この謙虚な初めの言葉が、バクダーディーの「オリジナルではない」というところに、深い意味がないだろうか？

3 ISと情報機関

NSA・アメリカ国家安全保障局の元局員のエドワード・スノーデン氏はこんな証言、暴露をしたという。「米・英・イスラエルの情報機関は、ISIS（ISの前身）の創設に関与し、『スズメ蜂の巣（HORNET NEST）作戦』の名でそれをつくり出した。



ISISの指導者は一年間モサドの監視下に置かれ、この間スピーチの指導や軍事訓練を受けていた」と。「スズメ蜂」とはなんと意味深な命名であろうか。「スズメ蜂」は俗に「熊蜂」とも呼ばれる大きな蜂で、蜜蜂の巣を襲い、蜜を横取りしたり、幼虫を食い殺したり奪ったりする。自分たちにはではなく、米・英・イスラエルら情報機関・諜報機関にとっての敵に問題を作り出すつもりだったのだろう。

かつてアルカーイダの生みの親も、またFBIとCIAだった。ウサマ・ビン・ラーディン自身、アフガニスタンで反ソ義勇兵に加わり、CIAの訓練を受けて闘いをスタートさせた。これらのアフガン反共アラブ義勇兵は、ユーゴスラヴィア社会主義連邦解体戦争でもボスニア救援に送り込まれた。ソ連のアフガニスタン撤収によって居場所を失った要員たちは、CIAのキプロス秘密キャンプで、トルコ・米・イスラエル情報機関の協力のもとで、さまざまな訓練を施された。当時、アラブに居た私たちは、いくつものエピソードを聞いている。パレスチナ解放組織やアラブ中東の左派は、80年代の最初から、ビン・ラーディンらのムジャヘディーン（イスラーム聖戦士）とは対立する関係にあった。ただビン・ラーディンらが、「反米反シオニズム世界戦線」を呼びかけていた90年代には、パレスチナ勢力の中には協力する者たちもいた。

この「スズメ蜂の巣作戦」は、シリアのアサド政権打倒を目指して実際に行われたのだろう。バアス党は結党以来、イスラエルに譲歩する考えを持っていなかったため、イラク・バアス党を破壊したように、米・英・イスラエルはシリア・バアス党を破壊する機会を狙っていた。それは米国のネオコン勢力やモサドを中心に過去幾度も計画されてきたことで、新しいことではない。中東で活動していると「情報機関」の存在というのは日常的である。日本では「裏」のある話は「陰謀史観」的に否定してしまいが

ただ、実際目に見えて現れているのが中東である。ことにパレスチナ解放闘争には、イスラエルのモサドの精力的な諜報活動ばかりか、西側、東側、さらにアラブ各国の情報機関の暗躍がある。「味方」の国の情報機関には協力することによって「便宜」を図ってもらおうとする人々もいるので、味方にも警戒が必要だし、またどこにスパイがいるかわからないのが、私たちが活動する中東の実情であった。「便宜」というのは日本に居ては想像しがたいような、自らの命や家族、組織の防衛に関わる事柄である。

(もちろん、私の知る限りPFLPのメンバーには組織としても、そういう人はいなかったことは付け加えておきたい。)

70年代初期のことだが、私はバグダッドに住んでいた時、「エリ・コーヘン事件」のことをシリアの元軍人から聞いたことがある。「エリ・コーヘン事件」は、1965年1月に発覚したイスラエル諜報活動史ではよく知られているモサドのスパイ事件で、当時は有名な事件であった。本当はユダヤ系エジプト人のエリ・コーヘンが、イスラエルに移住したあと、諜報活動の訓練を受けてスパイとしてシリア人になりすまし、シリアに潜入した話。コーヘンはまず南米に入り、「南米に移住していたシリア人家族」の故郷シリアへの帰国という姿をとってスパイとして、62年1月シリアに「戻」った。軍高官やバアス党幹部と親しくなり、イスラエル国境沿いのシリア軍陣地の視察さえ同行した。しかし暗号電波の発信源から発覚し処刑された事件である。

このエリ・コーヘンを尋問した防諜関係の軍人の何人かは、70年のクーデターでハフェズ・アサド(今のシリアのアサド大統領の父)が権力を握ると、党内斗争に敗れ逃れて当時バアス党「左派」といわれたイラクのアル・バクル大統領下のバグダッドに亡命して来ていたのだった。

この亡命してシリアからイラクに来ていた元軍人たちと会う機会があった時に、イスラエル諜報機関、情報機関の手口をいくつか聞いた。その一つは徹底的教育によって、エリ・コーヘンのような有能なスパイを目的地に植えつけること。シリアの元軍人は、「イスラエル・モサドの本部側が欲ばりすぎた。それが結局エリ・コーヘンの失敗を招いた」と言っていた。もう一つはもっと頻りにリスクを少なくやる方法で、「最良の獲物をサポートすること」だという。「最良の獲物」というのは、敵国の中で、その政権に反対しているとか、特別に自分たちに利

益をもたらしそうなる人物を探し選ぶこと。そのためには情報活動(インテリジェンス)の妥当性が欠かせない。「獲物」というのは、その人物、そのグループが自分の信念、自身の哲学で何かを行なっていて、それが自分たちの戦略実現に役立つと考えた時マークし、近づき、支援しヘゲモニーを取らせる。この方法は国際機関などを通して、またはさまざまな基金、団体などをつくってサポートすること。自分たちの目的を遂げたらサポートをやめて撤退するので損失がない。

この方法はイスラエルに限らず西側の行う手口で、中東・東欧諸国に仕掛けられていると当時言っていた。実際、こういう手口は、私たちのまわりでも遭遇することもあった。さらにまた、小さな「武装グループ」を実際に作り、実績を一つ作ってから、パレスチナ解放闘争に加わりようとして来たグループもあった。そうした経験からすると、今でもスパイ潜入とターゲット(獲物)育成作戦は、モサドに限らず、米英ヨルダンの機関が引き続きやっているだろう。また敵・味方の区別のつきにくい今の無秩序の中では暗躍しやすいことだろう。アルカーイダに潜入していたのか、アルカーイダをやめて就職したのか、ある英諜報機関員は「友人」として今もアルカーイダとのネットワークを持つことを公言し、本名も明かしたりしている者もいる。

不可解なニュースもたくさんある。たとえば2月21日、イラク情報部は「イラク軍が西部アンバル州でISと戦い、拠点からイスラエル製兵器など大量押収」、「米国やシオニスト・イスラエル政権がISと情報・治安面で協力しており、米がISテロリストに対してヘリコプターで兵器を投下している」と暴露している。それに対してアメリカ国防総省関係者は、ISにあやまって投下されたと釈明している。また、バクダーディーがイラク・シリア国境付近カイムの町で空爆で負傷し、治療のためゴラン高原地帯からイスラエル支配地域に入ったとか、アルカーイダ系のヌスラ戦線(ISと統合したとバクダーディーが宣言したのち対立分離したが、2015年より再び同盟を組んでいるらしい)兵士が、イスラエル内病院で治療中の様子がネットに流出したりしているという。こうした情報は数々ある。

シリアのイマーム(宗教指導者)アブドゥラ・タミーミは、2012年6月、イスラエルのテレビに出演し、「私たちの敵はイスラエルじゃありません。シリアの大統領が敵なんです」と述べている。彼は反

アサド戦争を煽り立てることに一役買った人物である。シリアのムスリム同胞団が旧くからアサド政権に対決して来、彼もその一人だが、かつては大っぴらにはイスラエルとの接触は、アラブの人々、宗教者にとっても考えられないことであった。「アサド政権を打倒するためなら、イスラエルを利用してもかまわない」という新しい風潮が作られてきたのだろう。アルカーイダ系のヌスラ戦線はトルコ、カタール、サウジアラビアから支援を受けて、シリア反体制派武装勢力の最大手だが、イスラエルとの協力のエピソードもうなずける。

サッダーム・フセイン政権打倒のためだからと、クルド親米派がイスラエルと密かに結んでいたのは、私がまだアラブに居た時代からだった。イスラエルを「利用」しているつもりで「利用」されている現実。それはISを含むアルカーイダ系から「穏健派」といわれる武装勢力に至るまで、目先の利益に吊られて、そうした陥穽の道を進んでいるように見える。そしてまた、仕掛けた情報機関、諜報機関もまた戦術的に利益を得ても戦略的には次々と敗北を喫している。勝者はおらず、住民も資源も秩序も破壊されていく。もとより、こうした情報機関の活動は、住民、社会の持つ不安、欲求を背景にして成り立っている。ISやアルカーイダなどに対するCIAやモサドによる介入、「獲物育成作戦」など、そうした民衆の熱望の引き金とはなりえても、制御不能に民衆に呑み込まれてしまうものにすぎないだろう。

4 ISはどのように育ったのか

ISは3つの要素から現在成り立っている。1つは米国CIAによって育てられた反ソアフガン義勇兵から生まれたアルカーイダ系勢力、2つは米ブッシュ政権の2003年イラク侵略と失政から反米斗争に立ったイラク・バアス系勢力とそれを支えるスンナ派地域部隊住民、3つは「アラブの春」以降アルカーイダ外部勢力の介入によって立ち上がったシリア東北部を中心とするスンナ派部族住民勢力やスンナ派外国人。それらが結び合って現在のISが形成されているといえる。

当初のアルカーイダ系の「ゲリラ戦争戦術」は、バアス党や部族地域住民と結びつくことによって、それまでの行政機能を包摂して「陣地戦体制」を整えていった。そして「武装組織」から「国」への成長を可能にした。ここにISの大きな特徴がある。

(1) ザルカウィーの不審な来歴

イラクに居る「アルカーイダ」として突如米国政府名指しで登場した男が、IS創生の元となるヨルダン人、アブー・ムサアブ・アル・ザルカウィーである。

2001年「9・11事件」に対して、犯罪として司法で裁くという理性に則らず、時のブッシュ大統領は「これは戦争だ!」と叫んで、反米イスラーム武装勢力(いわゆる「アルカーイダ」)と共同するアフガニスタン・タリバーン政権に戦争を仕掛けた。それに乗じて、ブッシュ政権のブレンであるリチャード・パールらネオコンが、ネタニヤフが政権復帰するために1996年に書いた「基本提言」の内容を実行に移しはじめた。装いだけ「中東・北アフリカ民主化構想」と改めているが内容は同じである。その中には「オスロ合意」に反対し、PLOアラファト議長を排除して新しい指導者を求めるとか、イスラエルに譲歩しないイラク・シリア両バアス党政権「民主化」と記されており、中東の「イスラエルの安全保障」を構想したものである。

アフガニスタンのタリバーン政権を破壊すると、イラクのサッダーム・フセイン政権打倒のシナリオが作られた。いわく「イラクには大量破壊兵器がある」「サッダーム・フセイン政権はアルカーイダと協力関係にある」。この二つを金科玉条として2003年3月、米軍はイラク侵略戦争を開始した。すでに今では世に知られているように、もともとイラクには「大量破壊兵器」などは存在していなかった。しかし当時、コリン・パウエル米国務長官は「大量破壊兵器」があるとする偽りの証言と共に、イラクの治安当局と協力している「アルカーイダ」のリーダーとして、アブー・ムサアブ・アル・ザルカウィーの名前を国連安全保障理事会で公表した。たちまちザルカウィーは注目と脚光を浴びることになった。現地を知る者たちや識者はただちに疑問を呈した。サッダーム・フセインとアルカーイダが協力関係にあるという話が捏造であることは、中東を知る者ならわかることである。サッダーム・フセイン、アサド、カダフィーら、当時の「アラブ民族主義」を基本とする政権にとっては、アルカーイダら宗派勢力は敵だったからである。

アブー・ムサアブ・アル・ザルカウィーとはどんな人物なのか?

彼は1966年にヨルダンの都市ザルカに生まれた。労働者家庭でベドウィン部族の出身だったらしい。「若い頃は不良の小物犯罪者で、20代初めには逮

捕されて5年ほど服役した。この時サラフィ主義に染まった」といわれる。それからアフガニスタンに渡り、ムジャヘディーンに加わろうとしたが、すでにソ連は撤収。そこでアフガニスタンに拠点を作って反ヨルダン王政の活動をしていたという。アメリカとヨルダンの合同調査の結果、ザルカウィーは「ミレニアム・プロット」（千年紀を祝うためにヨルダンを訪れる観光客を標的にしたテロ・実行計画。本当にあったか不明）の首謀者と断定されたり、他のテロもザルカウィーの仕業だということが、あとからいろいろ「創作されている」とナポリオーニ氏を含む識者は言う。とにかくアフガニスタンに渡ったが、ビン・ラーディンに会ったという説はないようだ。ヘラートに小さな拠点を率いていたという説もある。「9・11事件」を経て、彼はアフガニスタンからイラクに侵入してくる。あたかも「サッダーム・フセイン政権がアルカーイダとつながりがある」と、米政府が騒ぎ立てるための証拠のようにイラクに入ってくる。そこはクルド人地区で、クルド人居住区バジャラの拠点に、アンサール・アル・イスラームというできたての組織があり、ザルカウィーは服役時代のコネで渡ったらしいという。（これらはロレッタ・ナポリオーニ氏の記述による）当時90年代にはアフガニスタンのイスラーム戦士たちは無数のグループがいた。中東・北アフリカ各地から集まった者たちが、それぞれグループを作り名のり、理解あるアフガニスタン・タリバーン政権下に拠点を持っていた。こうした中で、ずば抜けた兵站・財政力を持っていたのがウサマ・ビン・ラーディンらのグループであり、彼らが小さなグループの財政援助要請には気前よく協力していたのを知っている。またその頃、反米化していくこうしたイスラーム勢力に対して、CIAの財政援助を受けて「CIAを利用して」生きのびる勢力もいた。

その頃、ザルカウィーは「タウヒードとジハード



団」（「神の唯一性〔または神の下に一つ〕と聖戦」の意味）というグループ名の組織を立ち上げて率いていたという。こうして2003年3月23日、米軍はイラクに侵略した。そして早くも5月にはブッシュ大統領は「大規模斗争終結宣言」を行った。さらに12月にはフセイン大統領を拘束した。しかし反米反植民地斗争は逆に始まったのであった。日本は米軍の侵略を支持し、2004年1月から自衛隊をイラクに派遣する。しかしその年の10月になって、米調査団は「イラクに大量破壊兵器はなかった」という結論を出した。「やり得」で、ブッシュ政権のブレインのネオゴンによる戦略に乗せられた戦争であった。イラク人にとって、どれほどの思いであっただろう。反米ゲリラ戦は以降激化し、米占領軍とそれに追従する勢力への闘いが激化していく。後日談だが、当時自民党幹事長として、2002年2月、パウエル国務長官から「大量破壊兵器がある。日本も同調するよう小泉首相を説得してくれ」と言われたと山崎拓氏は、2015年4月3日の朝日新聞で述べている。また山崎氏は安倍首相は専守防衛から他国防衛容認に転換していると批判しつつ当時を語り、「イラク戦争という力の裁きの結果、ISという鬼子が生まれたものといえます。私には当時の判断に対する歴史の審判を受けているようにも見える。ISの製造者責任は米国にあり、間接責任は小泉首相にも私にもあると言えるからです」と述べている。

(2) 宗派対立を煽るザルカウィー

ザルカウィーのリーダーシップの下で、「タウヒードとジハード団」は活動をイラクではじめていく。この当時、アルカーイダ系は各国の各地にいくつも生まれはじめていたが、ザルカウィーが直接「アルカーイダ本部」の筋と関係があったかは不明である。しかしザルカウィーは自爆攻撃を初めてイラクに持ち込んだ人物である。「脚光を浴びた」のちから世界の注目を集めるような闘いが開始される。早くも2003年、米占領下の8月19日、バグダッド国連本部に最初の自爆攻撃をかけた。そして国連のデモ特別代表ら20人を爆殺した。

ザルカウィーらの闘い方には自爆攻撃の他さらに二つの大きな特徴がある。一つは非軍人や民間人を躊躇なく殺害する手法を取ること。それもアメリカを意図的に真似てオレンジ色の囚人服を着せてはすかきめ、殺害するやり方は2004年からはじまっている。米・英国人に続いて日本人の香田証生氏が、2004年10月31日にこのグループによって殺され

ている。この手法はISに引き継がれている。もう一つの特徴は宗派対立を煽り、宗派戦争を開始したのがザルカウィーらであったこと。すでに2003年8月ナジャフにあるイマーム・アリー廟を自爆攻撃し、シーア派信徒125人を一挙に爆殺した。殺された人の中には「イラク・革命最高評議会」（SCIRI）のハキーム師がいた。彼はサッダーム・フセイン政権下の弾圧を逃れてイランに亡命して、戻ったばかりであった。このようにザルカウィーのグループは自爆攻撃で戦闘員を消費し、厭わず、むしろ積極的に民間人を殺害し、シーア派への宗派戦争を仕掛けた。これがISの前身なのである。

アルカーイダ本部は勝手にアルカーイダを名乗ることや「反米反シオニズム戦線」の広がりを受容していたが、ザルカウィーらを2003年「イスラームを分断する手法だ」と批判している。2004年10月になって、ザルカウィーは初めてアルカーイダ本部に忠誠を誓い、「イラクのアルカーイダ」（「メソポタミアのアルカーイダ」が原名）と「アルカーイダ」をこの時期から名乗るようになる。

米国の専門団体の報告によると、ザルカウィーは4つの戦略をもって米軍を打倒しようとしたとレポートしている。第1にアメリカの同盟勢力を孤立させ、第2にイラク政府のインフラと高官を攻撃することでイラクの対米協調を阻止し、第3に民間プロジェクトと支援活動家を攻撃してイラク再建を阻み、第4にシーア派を攻撃することで米軍をスンナ派とシーア派の宗派間戦争に引きずり込むというものだという。

こうしたザルカウィーに対してくり返しウサマ・ビン・ラーディンとアイマン・ザワヒリは「イスラーム同胞（シーア派）に対する無差別攻撃は、アラブ地域におけるアルカーイダへの支持を損なう」と考えており、2005年に文書でザルカウィーの戦略を批判している。しかし、ISの前身たるザルカウィー・グループは宗派戦争をむしろ全面化させていく。こうした激戦中の2004年2月（2005年という説もある）、のちのカリフとなるバクダーディーは抵抗組織の設立に加わったとして逮捕監禁され、2009年頃に戦線に復帰することになる。次項(3)以降に述べる米占領軍政策は「イラク・アルカーイダ」のシーア派攻撃をさらに激化させ、バース党との共同、スンナ派部族の武装勢力との共同が進み、連合組織「ムジャヘディーン諮問評議会」が生まれ、2006年1月、賛同団体がスンナ派地域から

集り、5つの団体によって「ムジャヘディーン諮問評議会」が結成されると、「イラク・アルカーイダ」もそこに発展解消した。

こうした反米斗争の攻防は不断に諜報・情報機関を含む地下戦争を伴う。ザルカウィーの宗派戦争への異常な執着は、情報機関に注目されていったらう。

(3) 米占領軍政のイラク分断

2003年以降、米占領下のイラクでは、シーア派勢力がバース党やスンナ派を追放して米軍指揮下の権力を持つようになる。これまで述べたザルカウィーらの宗派戦争と、もう一方には米占領軍による宗派分断政策は、以降の今日に至るイラクの宗派対立を作り出すことになった。

2003年イラク占領後、アメリカとその同盟国が設置したイラクの暫定的統治機関である「連合暫定当局」（CPA）の最初の指令は、イラクの徹底的非バース党化であった。サッダーム・フセインのバース党メンバーが政府の役職に就くことをことごとく禁じた。さらにCPAはイラク軍と治安部隊を解体した。CPAつまり米占領軍は「世俗的国家イラク」を宗派的システムに変えた。

その結果、スンナ派が主流でバース党でもあった行政・軍から職を失った数十万人規模の人材が保障もなく失業し、野に放たれた。米欧はバース党の復活を恐れ、過剰な排除の上で国造りを始めた。CPAのポール・ブルマー代表は、さらにこれまで「国営」だったイラクの企業を米欧の外国企業に売り渡した。これらの企業は目先の利益のために動く略奪者たちだった。イラクは、いいように、米欧の食い物にされていった。

2005年になると、これまでのバース党世俗主義国家体制に替わる新しい「連邦国家憲法案」が示された。これまでサッダーム・フセイン政権に抑圧され、長く米国に依存して「飛行禁止地域」下に住み、反サッダーム・フセインの陣地をなしてきたクルドには、良い結果が与えられた。高い自治権のもとで地域政府を持ち、連邦国家においてはイラク国家大統領の位置がクルド人に与えられた。CPAに関わる米高官は、うまくいかなければ、クルド国家独立を次の段階で考えると公言していた。クルド地域は石油を産する分、米国の利権がからむのである。

またシーア派は人口の多数を占めていた（シーア派60～65%、スンナ派32～36% 全人口3342万人 [2013年]）。この比率数字はクルドのスンナ派も

含まれている。一般的にはシーア派6割、クルド2割、スンナ派2割強といわれてきた。単純多数決システムで宗教、民族分割の上に、その均衡を図る少数派に配慮のないものだった。そのため、シーア派は常に議会の多数派を占め、首相が得られる有利なものだった。バアス党を支える基盤であったスンナ派は人口の20～25%を占めるにすぎなかったもので、権限の乏しい副大統領職と常に少数派の議会の位置に落ち、要求を受け入れられる条件が少なくなる。加えて、クルド地域、南部シーア派とちがって、スンナ派が多数を占める地域は石油を産しない。世俗主義システムはCPAによって宗派民族分断支配に変わった。

2005年に示されたこの憲法に対する信任投票は、イラク行政18州で行われた。スンナ派住民の多い4州の地域では反対が圧倒的に多数を占めた(スンナ派住民の住むアンバル州反対96.96%、サラフディーン州反対81.75%、ニナーワ州反対55.0%、ディヤラー州反対48.73%)。憲法改正に関する国民投票規定では「3州で3分の2以上の反対票があれば不成立」とされていた。しかしCPA当局は「3州でスンナ派は3分の2は取れない」と読み、またスンナ派にボイコットさせないように「うまくやった」ので、スンナ派封じ込めの憲法は成立してしまった。クルド、シーア派が多数を占める他の14の州が信任したためであった。この結果、スンナ派住民全体に米軍政への憎悪、シーア派への恨みはさらに増した。シーア派によるサッダーム・フセインに対する

処刑時の様子も流出し、スンナ派はますます復讐の思いを増しただろう。米軍政主導のこうした占領政策による宗派支配が、のちのISを育てる母胎となった。

米政府のネオコン勢力とイスラエルは、それほどバアス党を怖れていた。バアス党は60年代からイラク、シリアの支配政党であり、ことにアラブ民族主義をめざす軍人兵士の中に根を張った。47年創立のアラブ復興党のミッシェル・アフラクラとアラブ社会党が合体して、53年に「アラブ復興社会党」は発足した(その略称がバアス党)。アラブ世界の統一と社会主義を目指す反資本主義、反帝国主義、反シオニズム政党で、スローガンは「統一・自由・社会主義」で、クーデターによる軍人による権力掌握を行ってきた。ナセル主義はナセルの理想や政策にアラブ民衆が熱狂して影響を受けたが、バアス党のような綱領・組織論はない。バアス党は各国に支部をつくり、世俗主義のうえ、組織の規律性が他のアラブの団体よりも厳しいことで知られていた。イスラエルに対しては妥協しなかったし、米欧イスラエルにとって脅威だったのは、冷戦時代からソ連と同盟が強固だったためである。国内統治は強権的一党独裁。シリアでは「統一戦線政策」「少数民族宗教政策」は寛容に進めたが、イラクでは80年代、サッダーム・フセイン時代になると、クルド、シーア派に対する抑圧がひどくなった。イラクは2006年、バアス党支配の下で世俗主義憲法にあったものが、こうして覆されたのである。(次号につづく)

後記

今号と次号に掲載します『イスラーム国』と宗派戦争は「情況」誌の7月号と8月号にも掲載されたものです。尚、129号に掲載しました「安倍中東外交とイスラエル」も「情況」誌5月号に掲載されました。

8月30日、国会議事堂前と日比谷公園で開催された「戦争法案廃案!安倍政権退陣!」集会に参加しました。小雨の降る中、予想を超えて12万人が参加したということです。いつものデモと違って、若い人や女性が多く参加しているのが特徴的。関東人は日比谷エリアに散在する宣伝カーステージに集まることになっていましたが、友人と私は、混乱する日比谷公園の入り口をやり過ぎて、国会議事堂前に向かいました。脱原発テントに辿り着くと、国家議事堂前は満員なので行けないとのこと。あきらめようとしていたら、あまりに人が多いため、歩道だけでなく車道もデモンストレーターに解放されたとのこと。では、と私たちはすさまじい人の波を分けて進み、国会議事堂前まで辿り着きました。あまりに人が多くてもう自分の意志で動けません。将棋倒しにならないように気をつけ、「戦争法案絶対反対!」などと叫びながら、僅かな流れに身を任せて進み、人々の波から歩道にかりうじて抜けて、はぐれた友人と脱原発テントで再会。全国でも様々な集会が、この大勢の国民の叫びを安倍は無視するのでしょうか?(Y)

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階
救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」
郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

「正誤」表

第 131 号

- ①3P(7/2)左5行目 郭は人類と→核は人類と
- ②3P(7/2)左4行目 「戦争法案→「戦争法案」(とじカッコ)
- ③3P(7/7)右下から4行～2行目
～の強奪システム・富の偏差は問われてべくして、今あまりの格差に(削徐)
- ④5P(7/16)左10行目 謝って逮捕→過って逮捕
- ⑤5P(7/16)左下から3行目 せいは→Sちゃんは(Sちゃんて統一)
- ⑥5P(7/18)左下から3行～2行目 よる→夜
- ⑦5P(7/22)左下から9行目 必要な時にはなた→必要な時にはまた～
- ⑧6P(7/24)左下から5行目 01・21 写真集→10.21 写真集
- ⑨8P(8/11)左上から3行目 安倍首相は以下に→如何に
- ⑩11P左上から1行目 車道も解放→車道も開放
- ⑪12P右上から1行目 は描いて→を描いて
- ⑫13P左(テロルと映画)終わりから10行目 アジユングセッティング
→アジェンダセッティング
- ⑬18P左下から1行目 イラクの古都サマラ→サマラー